

# 楽しさが広がり夢中になって遊ぶ園児を育む

～科学する心を育む共主体の保育を通して～

糸満市立喜屋武こども園 沖縄県

ここが  
Point!

## ハーリーごっこにみる地域に根差した「科学する心」の育ち

「喜屋武ハーリー」に関するやりとりや試行錯誤からは、地域の暮らしや情景、伝統文化など、そこで生活する人々の生きざまを鮮やかに想像することができます。ペットボトルなどで自分たちが乗れる船を製作する活動自体は、全国で見られます。しかし、「喜屋武ハーリー」が受け継がれる糸満市喜屋武の子ども・大人たちは、ほかの地にはない特別な思いをもって、この活動に取り組んでいたことは明らかです。子どもの興味関心の広がり、保育者の願い、地域の動きが交錯するなかで、共主体の保育が目指されていく過程も印象的です。今後、さらに地域に根差した「科学する心」の育ちを明確化されていくことに期待します。

## じゃあ、小学校のプールで浮かそう

6月になると、地域の行事「喜屋武ハーリー」の話題が子どもたちから度々出るようになった。「うちのお父さん、ハーリーの練習しているんだよ」「喜屋武ハーリー楽しみだね」と期待の声があがる。そこで保育者は、自治会に連絡をして、漁港にハーリー船を見にいく計画を立てた。

6月9日に行われた「喜屋武ハーリー」を見てきた子どもたちから、「お母さんとみてきたよ。」「お父さんもおハーリーに出たよ。」と伝え合う姿が見られた。後日、遊びの中で「船を作りたい。」と声が上がると、空き箱を使って思い思いの船を作り始める。空き箱が水で破けてしまうと「紙は水に負けた」とつぶやく。その後、発砲スチロールトレイやプラスチックの弁当箱、牛乳パックで作った船を見せてくれるようになる。製作遊びが充実するよう環境を整え、船の図鑑や絵本を用意したこと、ハーリーを見た経験やピクトグラフでの出来事を話題にしたことから、船を作りたい思いにつながる。

こども園のプールでハーリーごっこが成功した子ども



たち。「次は小学校のプールで」と思いが溢れた。小学校に連絡を入れると快く引き受けてくれた。早速、小学校プールで船を浮かせ乗る。しかし、バランスがとれず何度もひっくり返ってしまった。「あれー、なんですか」「もう一回」と繰り返し試すが、なかなか乗ることができなかった。その日のふりかえりで「船を広くしてみたら？」など気づきを伝え合った。

7月9日、子どもたちが作った船は、再び小学校のプールに登場した。「早く乗りたい」と子どもたち。船の幅を広げ、自分たちで選んだ強いガムテープで巻いた船は、子どもたちが乗ってもひっくり返ることなく、2人乗りハーリーが実現した。友達と共通の目的に向かって試行錯誤し取り組んできた「ハーリー船」作りは、子どもたちの心を動かし、夢中になって遊ぶ姿となった。

